

先人の足跡―25 ノーサイドへの努力―

米国本土爆撃と日米親善を 実行した男

海軍特務中尉 藤田信雄

教育問題プロジェクトチーム

富松 敬二 陸自88

はじめに

今から77年前（1942）の9月、潜水艦から飛立った帝国海軍の1機の小型水上機（二人乗り偵察機）が米国本土を2度にわたり爆撃したという事実を皆さんはご存知でしょうか。

米国は、建国以来現在に至るまで、他国の航空機によって本土を爆撃された経験はこのときを置いて一度たりともありません。

これを成し遂げたのは、伊号第二十五潜水艦の飛行長であり操縦手の藤田信雄飛行兵曹長（当時）と偵察員の奥田省二二等飛行兵曹（当時、昭和19年ダバオ方面で戦死）でした。潜水艦搭載の小型水上偵察機がただの1機で米国本土を爆撃するという大胆な作戦とその爆撃がもたらした結果は、戦後の藤田の人生を大きく運命づけることになりました。

米国本土を爆撃する

昭和16年（1941）12月8日の真珠湾攻撃以来、当初日本軍は破竹の勢

いで戦いを進めていきました。しかし翌昭和17年（1942）4月には、早くも帝都東京とその他の都市が米国の空襲（ドーリットル空襲）を受けます。これは、爆弾搭載量の多い双発爆撃機（陸軍のB25爆撃機）16機を空母に搭載し、その欠点である短い航続距離を補うために努めて日本の近海まで進出してから発進させるといふ、米国の奇想天外な作戦による初の日本空襲でした。

また6月には、ミッドウェー海戦において、日本は「赤城」「加賀」「蒼龍」「飛龍」の4隻の主力空母と多くの熟練航空機搭乗員を失うという痛手を受けます。

このような情勢の中、軍上層部としては、米国に対し用兵上の無理がなく、かつ効果的な方法で一矢を報いる必要を感じていました。

米国本土を爆撃するという途方もない作戦は、元シアトル駐在領事からの一通の手紙が軍令部の富岡作戦課長の目に留まったことから動き出します。手紙によると、米国西海岸の森林地帯では毎年山火事が発生しその対策に悩んでいる、何かいい方法で山火事を起こせば付近住民の脅威となり得る、というものでした。

軍令部第三課に勤務する井浦祥二郎

中佐参謀は、航空機搭載型潜水艦伊号二十五の艦長田上明次中佐の海兵同期（51期）であり、田上艦長の優秀さと同艦付き飛行長である藤田兵曹長の水上機操縦の卓越した技量を聞き及んでいました。後年ですが、鹿島海軍航空隊の教官時代、藤田は同型機である水上機で新鋭の戦闘機グラマンF6Fを撃墜するほどの腕前を示しています。

こうして、昭和17年（1942）8月初旬、南洋方面の作戦から帰国し修理休養中であつた伊号二十五潜水艦の藤田に対し、軍令部への出頭が命ぜられます。

藤田信雄は、明治44年（1911）10月13日、大分県の貧しい農家に生まれました。昭和7年（1932）、20歳で海軍に入ると、翌年には水上機の操縦手となり、開戦時には潜水艦伊号二十五の飛行長として29歳で真珠湾攻撃に参加しています（搭載機の不具合のため偵察任務を行うことはありませんでした）。軍令部に出頭した時には、数カ月後に30歳を迎えるというまさに

脂の乗り切った熟練操縦手でした。



出典：ウィキペディア

藤田は兵曹長（准士官）の士官ではない自分がなぜ軍令部などへ出頭するのか、何かの間違ひではないかと不思議に思いながら起きます。会議室に通された藤田は、数名の参謀に混じって参謀肩章を付けた中佐で昭和天皇の弟君、高松宮（宣仁親王）のお姿をそこに見て、これは只事ならぬ事態であることを直感しました。しかもその任務とは、極秘の米国本土爆撃だということです。作戦の内容とは、潜水艦で米西海岸の近海まで潜航して進出する、夜陰に紛れて浮上してから格納庫に搭載された小型水上偵察機を組立て、焼夷弾2発を搭載してカタパルトにより射出発艦し爆撃に向かう、焼夷弾は山林に投下する、爆撃後は舞い戻って潜水艦に収容される、というものでした。しかし、言うのは簡単ですが、焼夷弾の重さは2発で約150kg、非力な小型水上機にとつて、海面すれすれのカタパルトから飛び立つ際に波にでも触れば即失速して墜落してしまいます。また、米本土に侵入すれば、フロート（注・船形の浮き）を履き重い爆弾を抱えてフラフラ飛ぶ水上機は米軍にとつて絶好の射撃目標となることでしょう。首尾よく爆撃に成功したとしても、もし敵の航空機の追跡を受けた

場合は、潜水艦の居場所を敵に教えることとなるため搭乗員は決して潜水艦

の位置へ戻ることは許されていません。更に、潜水艦が会合場所での機体の収容を待っている間に敵に発見され、潜航することです。その場を離脱してしまっている

場合、航空機は潜水艦を発見することができず燃料切れで墜落するか、仮に無事着水できたとしても、搭乗員は書類を粉砕し機体を破壊して海に沈め、自らは自決するという決まりになっ

ていました。先の南洋作戦の折には、潜水艦との会合場所の天測を誤ったため燃料切れで危うく墜落寸前にな

るという経験も藤田はしています。このように、潜水艦搭載の水上機にとつてこの任務はまさに決死の爆撃行

であり、生還の可能性が極めて低い任務というべきものでした。

当初、アメリカ本土を爆撃すると聞いてサンディエゴの海軍基地からロサンゼルス

の航空機工場を爆撃するものとはばかり思つて小躍りした藤田は、聞き

進むにつれ、山林を単機で爆撃すると知つて一挙に興奮が萎えてしまいま

す。しかし、現地の人々にとつて山火事が如何に大災害となり得るかを理解

するにつれ、攻撃の費用対効果を最大限に発揮できる作戦だということを確認

信しました。更にこの作戦には、攻撃によって民間人を直接巻き込まずに済

むという人道的な側面もありました。4月の米国による初の日本空襲

(ドーリットル空襲)では、東京の早稲田中学校の校庭が機銃掃射を受けて

学生1名が死亡、19名が重軽傷を負う等、日本各地の学校や家屋、漁船等が銃撃を受けて死傷者を出してしまし

た。民間人を標的にしないという今回の攻撃の方針は、高松宮のお考えであつたとも言われています。藤田は、必ずや任務を成し遂げようと密かに誓

います。潜水艦搭載の水上機は、正式名称を「零式小型水上偵察機(E14Y)」と言

いますが、あの有名な零戦とは全く関係のない機体です。全長8・5m、全

幅11m足らずと小柄で340馬力の非力な複座の水上機であり、海軍では「金

魚」と呼ばれていました。主に偵察任務に使用されていましたが、今回は焼

夷弾2発を携行できるように改造が施されることになりました。爆弾を搭載

すると時速160km余りという、飛行機としてはかなり遅い速度しか出ま

せませんでした。命を帯びて横須賀を出港してから26

日目の9月9日未明、藤田兵曹長と奥田兵曹は潜水艦を無事に飛び立ち、途

中、米軍から発見されることもなくオ

レゴン州ブルッキングス市の東方15km付近に侵入し、アメリカ杉が群生する

しました。米国西海岸の近海に到着しからの数日間、なかなか潜水艦から

飛び立つことができないほどの悪天候に見舞われていましたが、当日も天候

不順で霧が深く立ち込めていたことが幸いしたのです。

とはいえ、藤田機の独特のエンジン音は現地の森林監視員により確認され、また微かに見える小型水上機が米

国にない機体であったため日本軍機と判断されて敵機来襲の報告がなされて

しまいます。しかし、これも濃霧のため藤田機は追跡発見されることはあ

りませんでした。黒い煙は藤田機を待ち受ける潜水艦からも確認できたとい

い、艦内からは万歳の歓喜の音が沸き起こりました。後

日、火災場所に残された爆弾の先端部分を含む破片から、この火災が日本の

爆弾によって引き起こされたという事実が米国により正式に確認されまし

た。10日後の9月29日、藤田と奥田そして伊号二十五潜水艦は、オレゴン

州の森林への2度目の爆撃も成功させます。しかし、森林の樹木はここ数日の

悪天候のせいで湿気を含んでいたので、2度の爆撃ともに焼夷弾による火

災は当初予期したほどには燃え広がることはありませんでした。

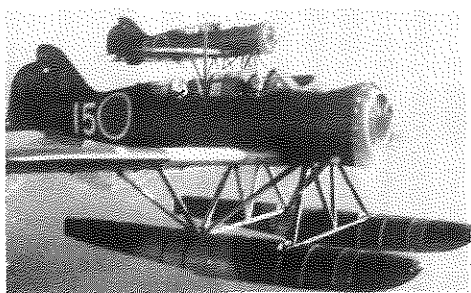
与えられた任務を見事に遂行した藤田でしたが、大規模山林火災を発生させるという所期の目的を達成すること

は叶わず、心理的な脅威を与え得たとしても作戦としては失敗と言うべきものでした。そもそもが極秘任務だった

こともあり、藤田は誰に語ることもない込みます。

藤田はその後も水上機による偵察任務を遂行していましたが、翌昭和18年(1943)には少尉となり、教官として鹿島海軍航空隊で後輩の育成に当たります。戦況の悪化に伴い、後輩の育成は特攻要員の養成へと変化してい

き、いてもたってもいられず、昭和20



出典：ウィキペディア

焼夷弾の燃え上がる炎と立ち上がる

年(1945)4月、藤田は自ら特攻を志願します。7月、水上機特攻の訓練のため第二河和海軍航空隊へ移り特攻の日を待ちますが、海軍中尉としてそこで終戦を迎えました。藤田33歳の夏でした。

日米親善の懸け橋として

戦後17年が過ぎようとした昭和37年(1962)4月、藤田は、時の内閣官房長官大平正芳の秘書から突然の電話を受けます。大平が赤坂の料亭で会いたいというのです。驚きとともに、政府高官からの申し出を断ることもできず、5月、藤田は大平と面会します。その内容とは、米国が藤田の身元照会をしてきたので外務省を通じて回答したこと、まもなく何かしらの文書が藤田のもとへ届くこと、先の戦争の結果米国では元日本軍人に対する反感はまだ相当に強いので、藤田が万一渡米しても日本政府としては身の安全を守れないこと、この件に関して日本政府は一切関知しない、というものでした。藤田は、米国本土を爆撃したことで戦犯として訴追されるのではないかと不安になります。しかし後日藤田に届いたのは、ブルッキングス市というオレゴン州の田舎町の市長からの同地への招待状と、市の青年商工会議所からの友好親善を願う手紙でした。その手紙

には、「米国は開国以来、外敵の侵入を許したことがなかった。日米戦争において、貴殿はこの史上の記録を破って単機でよく米軍の厳重な警戒網をかいて潜り、米国本土に侵入し、爆弾を投下した。貴殿のこの勇氣ある行動は敵ながら実に天晴である。その英雄的な功績を賛えるときにも、更なる日米の友好親善を図りたい」とありました。藤田は、いくら戦争とはいえ爆撃を行った敵国人を招待することが何故友好親善になるのが理解できませんでした。自分を殺すための誘い水ではないかとも思いました。しかし、家族も招待したいとあることから、よもや家族ともども危害は加えないだろうと考え招待を受けることにします。もしアメリカで辱めを受けるようなことがあれば潔く自害しようと、藤田家に代々伝わり、戦争中も常に携行した日本刀を持つていくことにしました。米国本土爆撃から20年後の同年5月28日、藤田一行はオレゴン州に到着し、ブルッキングス市では日本の英雄として彼の思いに反し熱狂的な歓迎を受けます。同地の年に1度の催し事である「アゼリア祭り(つづじ祭り)」にその年のゲストとして招待されたのでした。藤田はオーブンカーで街中をパレードし、盛大なパーティーの席ではスピーチを求められました。藤田は、市の招待を感謝し、かつての敵国軍人である自分

を英雄として受け入れてくれた市民にも感謝するとともに、もしものために持参した日本刀を友好親善のしるしとして、「この軍刀は私の魂です。片時も離さず、もちろんオレゴン州出撃の時も身に付けておりました。しかし、もう私には必要ありません。これを貴市に寄贈させていただきます」と市長へ手渡し、市民の大喝采を受けます。地元紙は「フジタ、サムライの魂を市長に贈る」と見出しを付けました。藤田50歳の時です。



出典：オレゴン・パブリック・ブロードキャスティング

帰国した藤田は、人には語りませんがアメリカで受けたこの歓迎に応えるための密かな計画を抱きます。戦後の混乱の中、藤田は金物屋の行商で生活を立て、小さな金物店から今では藤田金属という社名を掲げ、茨城県内で会社社長として5階建ての自社ビルを持つまでに成功していました。しかし、昭和52年(1977)秋、社

長を息子に譲り会長となるとその僅か2年後には15億円の負債を抱えて倒産してしまいます。息子は社長の器ではなかったのです。この出来事で、藤田の密かな計画は大きく狂ってしまいます。それでも藤田は計画を諦めようとはしませんでした。

昭和55年(1980)、倒産の整理が一段落すると、藤田は70歳を目前にした高齢にもかかわらず、プライドを捨てて航空隊の元教え子が社長を務める双葉電線という会社に就職を頼み込み、社員送迎のバス運転手兼工場作業員として住込みで採用されます。その後の藤田は、着る服は毎日が工場の作業服、余暇は極力外出せずに月数冊の読書を楽しむという切り詰めた生活の中、少ない給料からは毎月3万円を必ず貯金するようにしました。体の弱い妻は藤田の軍人恩給で別居生活、息子夫婦はカナダへ出国という、まさに一家離散ともいべき状態でした。

藤田の勤勉な仕事ぶりと戦時中の教官時代に養った人を管理する能力は少しずつ上司や同僚に認められるようになり、なんと81歳で退職する時には工場長として取締役を務めるまでになっていました。

さて、藤田の計画とは、米国へ招待されたことのお返しと友好親善のためブルッキングス市の高校生を自費で日本に呼び寄せるといったものでした。

昭和60年(1985)7月8日、米国招待から23年後、様々な人々の協力もあり、ブルッキングス市のハーバー高校から3人の女子学生を呼ぶことができました。折から茨城では「つくば万博」が開催されておりその見学や地元高校生との交流、在日米軍基地訪問等様々なイベントがもたれました。こうして、藤田の長年にわたる計画は実行され恩返しは果たされたのでした。

歓迎パーティーの席上、高校生に同行していたブルッキングス市の青年商工会議所の会長から驚きの発表がありました。なんと合衆国大統領ロナルド・レーガンから、市民レベルの日米友好親善活動に対する藤田への感謝のメッセージとホワイトハウスに掲揚した証明書付のアメリカ国旗が贈呈されたのでした。

藤田とブルッキングス市との交流はその後も続きます。

平成2年(1990)にはブルッキングス市を再訪し、この際、市は5月25日を「藤田信雄デイ」として制定しています。

平成4年(1992)には爆撃50周年の節目として招待され、オレゴンの山中に分け入って爆弾投下地点を示す標識板の傍に、50年前に焼いてしまったアメリカカ杉へのオマージュとしてその苗木を植樹しました。また、映画『ト

ラ・トラ・トラ』の名物プロデューサーで脚本家でもあるエルモ・ウィリアムズによる映画化の話も持ち上がりましたが、映画監督イラナ・ソル女史(米本土に対する風船爆弾を扱ったドキュメンタリー映画「紙の翼に乗って」の監督)により、ドキュメンタリー第2弾として映画化の話が進められているそうです。

平成5年(1993)には、藤田が勤める双葉電線の社長からの寄付金と従業員のカンパで集めた資金とともに、ブルッキングス市に立派な図書館が完成し、その一角の「フジタコーナー」には、初回訪問時に藤田が市に寄贈した日本刀が常設展示されました。また、平成7年(1995)は5回目の最後の訪問となりましたが、当時83歳であったにもかかわらず、セスナ機を自ら操縦して爆撃で飛行した空路をたどって見せたということです。

米本土爆撃から55年後の平成9年(1997)9月30日、藤田は肺がんのため85歳の生涯を閉じました。奇しくもその日は、ブルッキングス市名誉市民の伝達の日でした。名誉市民証を持参した藤田の長年の友人、元米海兵隊員のパウーズ氏は病室に入るなり泣き崩れたといっています。米本土爆撃という戦時中の極秘任務に端を発したこの運命の歯車は、戦

後、藤田の生涯を通じて草の根の日米友好親善活動へと向かわせたのでした。終わりに

戦時中は当時の多くの若者と同じように兵士として戦場に赴き、海軍の水偵察機の操縦手として命ぜられた任務を黙々と遂行した藤田も、戦争が終わればまた一市民として静かにその人生を終えるはずでした。

しかし、米本土を爆撃するという大胆な任務を与えられたこと、彼の技能の高さと幸運によって奇跡的ともいえる爆撃に成功したこと、大火災を誘発できなかったことが結果として米国人的・物的被害を与えず、しかしながら心理的インパクトは与え得たこと、その後も特攻要員となりながらも終戦を迎えることができたこと、そして戦後を逞しく生きた精神力と不断の努力、勤勉かつ恩に報うという律儀な性格と相まって、藤田に全く別の人生を歩ませたのでした。

元帝国海軍特務中尉藤田信雄は、この降りかかった運命に真つ直ぐに向き合い、自分を律し、自分にできる範囲で行動を起こして日米間の友好親善に尽くしたのです。紳士のスポーツといわれるラグビーは、激しい肉弾戦をもって陣地を取り合いますが、そのルールにノーサイド

というものがありません。戦いが終われば勝敗の別はなく、お互いに健闘をたたえ合うという精神です。

米本土爆撃から55年後の平成10年(1998)10月5日、ブルッキングス市において藤田の一周忌が営まれ、爆撃跡地の標識板の傍に、娘の順子さんの手によって遺言通りに藤田の遺灰の一部が埋められました。

こうしてブルッキングス市は、文字通り藤田の第2の故郷となったのでした。ブルッキングス市との交流は、藤田の死後も順子さんとお孫さん等によつて今も行われているそうです。

【参考文献】

- ・倉田耕一『アメリカ本土を爆撃した男』
- ・榎 幸『アメリカ本土を攻撃せよ』伊25号出版
- ・秦 郁彦『太平洋戦争航空史話』
- ・エス・チャング『タイム記者が出会った「巨魁」外伝』
- ・サミュエル・モリソン『太平洋戦争アメリカ海軍作戦史』
- ・バート・ウェバー『Bretalton(報復)』